

とある天才科学者の臭気に塗れた館

フランケンシュタイン。

この単語を聞いて「顔中が継ぎ接ぎだらけの大男の怪物」を想像したなら、すぐに認識を改めて欲しい。

「フランケンシュタイン」とは怪物ではなく、怪物を生み出した科学者の名前である。多くの人が想像する怪物は、彼が死体を繋ぎ合わせて作った存在で、原作小説では単に「怪物」としか呼ばれない。

私——天野ケンスケがその事を知ったのは、確か中学生になったばかりの頃だった。

当時、私はこの事実に大きな衝撃を受けた。

同時に、私は彼の生み出そうとした「理想の人間」というものに強い興味を抱き、研究に没頭するようになる。

頭でっかちで、要領の悪い変わり者。

それが研究に没頭する私に対する周囲の評価だったが、否定する気はなかった。

実際にその通りだったし、私は「人間」という存在が嫌いだったからだ。

研究を進める過程で、私はいくつもの革新的な発明を生み出した。

それらの発明は医療など様々な分野で活用され、私に莫大な利益をもたらした。

しかし、私の心までは満たしてくれなかった。

私の心が満たされたのは、「フランケンシュタイン」の事実を知ってから 10 年近く経ってからだった。

ついに「理想の人間」を誕生させる事に成功したのだ。

その名は、ジル。

プラチナを繊維にしたようなセミロングの銀髪。

新雪のように白く整った顔に、エメラルドのように輝く瞳。

程よい大きさの胸に、キュッと引き締まったウエスト、そして少し大きめのヒップ。

その身体は、特別に培養した強化細胞と強靱な特殊合金の骨格で構成されており、人間とは比べ物にならないほど高い身体能力を有している。

美しさと強さを兼ね備えた、正に完璧な美少女だ。

そんな彼女にも、1つだけ大きな欠点がある。

しかし、その欠点は俺にとって大した問題ではない。

むしろ、俺にとってはその欠点こそが彼女を「理想の人間」と断言する最高の美点なのだ。

*

毎朝、ジルは私を起こしに来る。

ちゅぷっ、ちゅるるっ、れろれろっ・・・！

「んっ、んんっ・・・」

股間に感じる心地よい快感と共に、私の意識は覚醒する。

目を開けて最初に飛び込んでくるのは、いつもジルの尻を包むショーツだ。

(今日はチェリーピンクか)

私を飽きさせないため、ジルは様々なショーツを穿いてくる。

今回は尻の谷間に食い込むチェリーピンクのTバックで、細い股布からアナルの皺が見え隠れしている。

「おはよう、ジル」

「ふはぁっ、おはようございます、マスター」

私の呼び掛けに、ジルも私の肉棒から口を離して応じる。

そう、先程までの快感の正体は彼女のフェラチオだったのだ。

「今朝もお嗅ぎになられますか？」

「ああ、強烈なのを頼む」

「かしこまりました・・・んっ！」

ジルが私の言葉に頷いた直後、

ぶぶぶううううううううううう～～～っっっ！！！！

彼女の尻から爆音と共に、人肌の熱風が私の顔へと浴びせられる。

「ぐっ！？」

腐ったキャベツを濃縮したような強烈な悪臭においが私の顔を包み込む。

これがホームクルスであるジルの抱える欠点。

彼女は新陳代謝が常人より遥かに活発なため、非常にオナラが出やすい体質なのだ。

だが、「女の子のオナラが好き」という性癖を持つ私にとって、それは完璧な彼女をより完璧にする要素なのである。

ぎゅるるるるる～～～っ！

「んっ・・・もう1発、出そうです、マスター」

腹を低く鳴らしながら、ジルが淡々と報告してくる。

「出せ」

「かしこまりました・・・んっ！」

ぶぼぼおおおおおおおおおおおお～～～っっっ！！！！

私が短く命じると、すぐにジルが2発目のオナラを放つ。

ちゅぱっ、ぴちゅっ、れろれろ、ちゅううう・・・！

それと並行してフェラチオを再開し、私の肉棒を刺激してくる。

程なくして、

「うっ！」

大量の精液がジルの口内に放たれる。

「んんっ・・・ごくんっ。ごちそうさまでした」

ジルはそれを苦もなく飲み下し、私の上から降りる。

この時になって、ようやく彼女が纏うミニスカートのメイド服が確認できるようになる。

「既に朝食のご準備ができております」

「わかった」

ジルが素早く口許を拭い、着替えを差し出してくる。

それに手早く着替えたところで、私の1日は始まった。

*

朝食を摂るために、ジルを従えて食堂へと向かう。

私の屋敷は本土から少し離れた小島にあり、下手な小学校より広い3階建ての洋館だ。

また、上から見ると片方が短いコの字型をしており、その短い方の1階に私の寝室、中央の2階に食堂がある。

「今日は雨か」

窓の外を見ると、灰色の空からは無数の水滴が降り注いでいた。

「はい。しかし、予報では昼から晴れてくるとの事です」

「そうか」

それなら午後から散歩でもするか。

そんな事を考えつつ、食堂へと続く廊下を歩いていく。

この屋敷に、私以外の人間は住んでいない。

だが、1人暮らしという訳ではない。

この屋敷に住んでいる「人間」が私だけというだけだ。

「おはようございます、マスター」

ジルを従えて食堂に到着すると、ロングスカートのメイド服を着た銀髪の少女が挨拶してきた。

見た目はジルそっくりだが、身長は彼女より 10 c m ほど高く、Hカップの巨乳である。

「おはよう、002」

彼女の名前は、002。

この屋敷に 108 人いるホムンクルスの 1 人で、001 以外のホムンクルスたちを統括する副メイド長でもある。

「失礼いたします」

私が着席すると、すぐに 003 と 005 が料理を運んできた。

2 人とも雰囲気はジルに似ているが、前者はかなり小柄で髪も長い癖っ毛、後者は顔立ちがより女の子っぽく何処か眠そうな目をしている。

既に気付いているかもしれないが、002 以下のホムンクルスたちはジルを生み出す過程で生まれたプロトタイプである。

私にとってジル以外のホムンクルスは「その他大勢」でしかないので、彼女たちには名前を付けておらず、チョーカーとエプロンに書かれた個体番号で呼んでいるのだ。

「お食事の前に、私たちのお嗅ぎになられますか？」

「そうだな。出してもらおうか」

「「かしこまりました」」

002 の言葉に頷くと、すぐに 3 人が私に尻を向ける格好でテーブルの上に四つん這いになる。そのまま 3 人は一斉にスカートをたくし上げ、それぞれ黒のレース、白とピンク、シンプルな白のショーツを露わにする。

「ご準備できました」

「・・・」

002 の言葉を受け、私はゆっくりと彼女たちの尻に顔を近付ける。

「「んっ！」

ブブブブウウウウウーッ！！

ブベベベベベベベベベベベベベベベッ！！

ブッスウウウウウウウーッ！！

直後に 3 人の声と放屁音がユニゾンする。

002 の腐卵臭、003 の発酵臭、005 の刺激臭。

三者三様の悪臭においが混ざり合い、私の鼻へと流れ込んでくる。

「くっ・・・！」

かなり濃密な悪臭においだが、3人合わせてもジルのオナラには敵わない。

「いかがでしたか、ますたー？」

テーブルを下りた3人を代表するように、003が問い掛けてくる。

「悪くはなかった」

「あ、ありがとうございますっ！」

003が深々と頭を下げたのに倣い、002と005も淀みない動作で一礼する。

「さて、食事にしようか」

周囲を漂うオナラの残り香までしっかりと堪能したところで、私は用意された朝食に手を伸ばした。